

中国人の日本観——郭沫若

蘇 德 昌*

中国人的日本観 — 郭沫若

苏德昌

要 旨

郭沫若は果たして百獣の王である獅子なのか、それとも寺院の塔の上の風見鶏なのか。毀誉褒貶、賛否両論、未だに決着が付かない。とりわけ彼の中国プロ文革中の豹変ぶり、始めは四人組万歳、最後は四人組打倒は、国民は言うに及ばず、知識人でさえこのような振る舞いはしないのというのが万人の認めるところである。彼の人々に与えた印象は最悪である。本稿では中国の近代化に貢献したのか、それとも妨害したのかを基準に彼の功罪を分析した。五四運動時期・北伐・日中戦争から中華人民共和国の成立・農地改革までは、彼は基本的に手柄を建てたと言えるけれども、それ以降、亡くなるまでは完全にナンセンス或いは逆効果であった。全体から言うと、魯迅の言う通り、彼は才子プラスごろつきであった。然し、彼の中国の文化界・学界に与えた影響は看過できないし、特に、中国共産党の知識人政策・対日政策の制定及び実施に、彼の果たした策士・代弁者的な役割は小さくない。

彼は2回日本に渡っているが、1回は留学、1回は亡命で、合わせて20年も滞在した。彼の人間形成は日本で完成した。彼は日本の有利な条件をフルに利用し、又アンナ夫人の献身的な努力と支持もあって、創造社前後のロマンチズムの詩作、革命と戦争の一側面を描いた自叙伝、歴史・考古学・文字学の研究等の仕事が出来た訳である。

郭沫若は、日本は中国より経済的な土台から政治・文化・社会の上部構造に至るまで、全面的に中国の文化を導入し、原始社会から奴隷制社会を飛び越えて直接封建制社会に突入した。又ヨーロッパ文明に倣って、所謂東洋の奇跡たるものを実現し、資本主義社会に進み、列強の仲間入りをすることが出来た。その原因はと言うと、日本の植民地的な価値は中国よりはるかに低く、中国は帝国主義各列強の目を逸らすという言わば盾の役割を果たした。そして、中国は又日本にとって、最高の原料供給地と最大の市場であった。ところが、日本は恩知らずで、恩を仇で以て返した。何十年この方中国を侵犯し、最後は全面的な侵略戦争まで起こした。というのが、彼の日本観である。

戦争という時代背景並びに彼と日本人の付き合いはそれほど広くも深くもないということがあって、彼の日本人に対する見方は、全体から言うと、消極的、批判的で、冷たく、時には偏見もあった。

I. 獅子か風見鶏か

1. 豹変ぶり

中国語に「蓋棺論定」（人は死後になってはじめて評価できる）という言葉があるが、郭沫若

の場合は生前は勿論のこと、亡くなってからも評価は決まらず、未だに肯定的と否定的、正と負の二つに分かれている。

ただ郭沫若の環境変化への対応の迅速或いは変身の速さ、豹変ぶりに彼の右に出る者はいないということには誰もが異論のないところである。

馬彬¹⁾は郭沫若の一生を3段階に分け、第1段階は少年時代から創造社時代までとし、正統的な観念を具え持ちながらも、才子・無頼漢であったというのに対し、第2段階は北伐から日中戦争終了までで、政治的な欲望に支配され、それと日和見主義の総合体であったし、第3段階は国共内戦での共産党軍の勝利から逝去直前までで、それは弄臣と重臣の間を彷徨い歩く存在であったと評している。

金達凱もその著²⁾の冒頭で、

「近代中国知識人の中で、郭沫若は頗る特別な人物である。彼は文学上そう大した業績もないのに、『文学者』の名声を享有して、文壇左翼の偶像になっているし、科学の上でも、これという専門もないのに、中共の『科学院』に30年もの長期に亘って君臨した。彼の歴史研究というものは、歴史の真実を研究するのではなく、如何にして現実の政治に役立たせられるかというところにあった。彼は封建制反対、自由熱愛を標榜しながらも、その作品の多くは自由を扼殺する専制政治への謳歌であったし、新封建主義に対する讚美歌であった。彼は早くから共産党員であり、それも『特別党員』であったにもかかわらず、長い間無党派無所属『民主人士』の仮面を被り、世論や人々を騙し続けてきた。彼は一生権勢に迎合し、反復常なき背信行為を繰り返し、悪人を助け、悪事を働いた」

と批判し、郭沫若を典型的な風見鶏及び起き上がり小法師と決め付けている。

郭沫若の次男郭博は「父はいくども、間一髪というところを、うまく切りぬける名人でした³⁾と話したことがあるそうであるが、1928年2月23日夕刻友人の鄭伯奇が郭沫若のところに来て、中共党員李一氓からの情報を知らせてくれた。それは上海竜華衛戍司令部が既に彼の住所を探りあて、深夜に逮捕に来るという情報であった。郭沫若は急いで内山完造に頼み、日本人の経営する八代旅館に隠してもらった。そして、翌日又内山完造只一人に見送られて日本の郵船「戸山丸」にて日本に脱出した。その10日前の13日に、周恩来等が彼の住所を訪れ、党組織は彼が先ず日本に行き、それから何とかしてソ連に行くよう決定したと伝えている⁴⁾ところから見ても、この情報は党の地下組織が手に入れたものかも知れないが、彼が頭の回転が速い、行動が敏捷であることには違いない。1937年7月25日、錢瘦鉄、金祖同の協力で、千葉県市川市の住所から一人で抜け出し、横浜経由で神戸に行き、カナダの郵船「日本皇后丸」に乗り、帰国したが、そのために、8月、アンナと長男郭和夫は一ヵ月以上拘束され、酷い目にあった。⁵⁾よくも厳しい憲兵や刑事の監視の目から逃れられたものである。

中華人民共和国成立後、共産党は知識人をブルジョア階級に属する者と見、階級闘争の対象にし、所謂思想改造・労働改造を強要した。1950年の思想改造運動・胡適思想批判、1951年の映画「武訓伝」批判、1954年の俞平伯「紅樓夢研究」批判・胡適思想再批判と連年のように政治運動を展開し、知識人を苦しめた。1954年の胡風反革命集団反対闘争に至っては、胡風は監獄に入れられ、多くの著名な作家が弾圧された。そして、次が1957年の彼の悪名高い右派反対闘争である。

ほとんどの知識人が槍玉に挙げられ、塗炭の苦しみを嘗め尽くした。ところが、郭沫若だけは何事もないどころか、共産党のお先棒を担ぎ、知識人をやっつけるのに手を貸した。1957年9月17日、彼は中国作家協会党組織拡大会議で、「努力して自分自身をプロレタリア階級の文化的労働者に改造しよう」という題で発言し、次のようにまで言い切っている。⁶⁾

「個人の努力というものは怠り易くなるものであり、最も必要とするものは党の指導・党の監督・党の教育である。……われわれは党が文化・芸術界、知識人全体に対し、指導を強化し、監督を厳しくし、党員作家も非党員作家も姑息しないよう切にお願いする次第である。」

更に始末が悪いのはこれら全てがみな無党派無所属「民主人士」の身分で行なわれたことである。共産党でもないのに、共産党よりも左寄りのことを言うというので、欺瞞度が高くなり、共産党はなお一層彼を利用する訳である。事実、郭沫若は早くも1927年8月に、周恩来・李一氓の紹介で入党しているのに、1946年1月の政治協商会議も、1949年9月の中国人民政治協商会議もみな無党派無所属「民主人士」の身分で参加し、同年10月、中央人民政府委員・政務院副総理・文化教育委員会委員長・科学院院長に就任したのもその身分である。世論や国民に共産党一党独裁ではなく、民主的な連合政権のイメージを与えようとして、長年に亘り身分を隠したのは明らかであり、これは共産党がよく使う常套手段である。1958年になり、共産党はその政権の基盤が絶対強固不動なものになり、もう隠す必要がなくなったと判断し、12月に機関紙「人民日報」で郭沫若の入党を報じたのである。

1966年から11年続いたプロレタリア文化大革命は彼にとっても一番の試金石になった。1966年4月14日、彼は全国人民代表大会常務委員会第30回総会の席上、「労農兵に学び、労農兵に奉仕する」と題して自己批判をし、次のような発言をした。⁷⁾

「普通の人目から見たら、私は作家であり、詩人でもある。そして又何か歴史学者でもあり、何十年この方ずっとペンを手に持ち、書き続けてきた。字数で言えば、恐らく何百万字にも上るのであろう。しかし、今日の基準から言えば、私がこれまで書いてきたものは、正確に言って、みな意味や値打ちのないものばかりで、全部焼き捨てるべきである。その主な原因は何かというと、毛沢東思想をきちんと学び、それで以て自分自身の力としなかったからである。私の階級観は時にははっきりしなかった。……私は労農兵に学ぶ決意である。私は田舎に行つて泥まみれになり、工場に入って油まみれになりたい！」

1967年6月5日、彼はアジア・アフリカ作家常設局主催のシンポジウムの閉会式で、「一生毛主席の良い学生になろう」という題で挨拶し、四人組のボス江青に対して、次のようにおべっかを使っている。⁸⁾

「親愛なる同志江青、
あなたはわれわれの学ぶ良いお手本、
あなたは向かうところ敵なしの毛沢東思想の活用に長じている。
あなたは文芸戦線で勇猛突進し、
中国の舞台を労農兵の英雄像で飾った。
われわれは奮闘努力して世界の舞台をも英雄像で飾ろう！」

彼は左傾病を患い、左へ左へと突っ走る毛沢東だけでなく、四人組にも追随した甲斐あって、

1969年4月には中国共産党第9回全国代表大会に出席することが出来、それまでになれなかった共産党の中央委員会委員に選ばれた。1973年8月に、中国共産党第10回全国代表大会に続けて出席し、再度中央委員会委員に選ばれた。因みに、劉少奇・鄧小平はじめ多くの共産党・政府・軍のトップクラスの高官・将軍・上級幹部さえ肅清され、失脚した時にである。1976年10月、四人組が打倒粉碎されるや否や、彼は豹変して、

「人心晴れ晴れ、四人組打倒。……華主席支持、党中央支持。」

と歌い上げた。⁹⁾ それで、彼は1977年8月に又中国共産党第11回全国代表大会に出席することが出来、中央委員会委員に選ばれたのである。もしも彼が1978年6月にこの世を去らなければ、今度は華国鋒を批判し、鄧小平に付くのは想像に難くない。

彼の遺言により、骨灰は山西省昔陽県大寨に埋葬された。大寨は文革中農村人民公社の手本・鑑とされたところである。

2. 魯迅との関係に於いて

20年代に創造社と魯迅の間で激烈極まりない論争が展開されたのは有名な話であるが、郭沫若は「文芸戦線の封建的残党」¹⁰⁾ という文章で魯迅を次のように罵っている。

「彼は過渡期を彷徨い歩いている者かも知れない。彼は古いブルジョア階級のイデオロギーには既に疑問を抱きはじめているが、新しいプロレタリア階級のイデオロギーに対する認識にはこれ又確固たる自信がない。それ故に、彼の態度は中間的で、不革命的である。更にもう少しはっきり言うならば、彼は反革命までは行っていないであろう。……彼は資本主義以前の封建的残党である。資本主義は社会主義に対する反革命であり、封建的残党は社会主義に対しては二重の反革命となる訳である。であるから、魯迅は二重的な反革命の人物であると言える。前に魯迅は新旧の過渡期を彷徨い歩く者であり、ヒューマニスト・人道主義者であると言ったが、これは完全に間違いである。彼は失意のFascist・ファシストである。」

このようにますますエスカレートする攻撃に対して、魯迅は「上海文芸の一瞥」¹¹⁾ の中で、創造社を新才子派とし、その手口は「才子+ゴロツキ式」であり、「古今を問わず、一定の理論を持たず、あるいは主張の変化にそれなりのつながりが見出せず、その時々各種各派の理論をもってきて武器にするような人間は、すべてこれ、ゴロツキと称すべきです。」と言っている。この指摘は若かりし頃の郭沫若だけでなく、彼の一生・彼という人間を言い当てたものと言えなくもない。

これを受けて、郭沫若は「ごろつきの自叙伝の一部」として、「創造十年」を書きはじめる訳であるが、それより4年後、魯迅が亡くなったその日の晩に、彼は魯迅をゴーリキーと並べ、二人を光り輝く大きな星に譬えて、悲しみ惜しんでいる。¹²⁾ そして、

「中国文学は先生によって新紀元が切り開かれ、先生は中国の近代文芸の真の開山であることは億万の人々の共通した認識である。……先生の健闘精神は年を追うにつれて強まり、死に至っても衰えを見せなかった。これこそわれわれに残してくれた非常に素晴らしい手本であり、教えでもある。……魯迅先生はわれわれ中国民族の近代に於ける一つの傑作である。」

と、最高の讃辞を送っている。

一周忌の記念行事での挨拶を依頼した時も、すぐその場で引き受け、「私は又魯迅を褒め称え

なければならない」と話したそうであるし、¹³⁾ 四周忌の記念会開会の前に、彼は友人に「魯迅は生前私を一生罵った。惜しいことに彼はもう亡くなり、二度と彼からの適切な関心を得られなくなってしまった。それに対し、私は魯迅の亡くなった後、一生彼を敬なければならない。しかし、惜しいことに私はもう年を取り、意を尽くして崇めることが出来なくなってしまった。」と言っている。¹⁴⁾

敬服・称賛すると同時にどこか仕方がなく、そうせざるを得ないという気持ちもあるように見える。その証拠に、彼の魯迅の十二周忌の記念行事での講演は党組織の指示と寸分も違わなかったし、それも傍にいた党の幹部に再三確認しながらやったと当該幹部は追憶している。¹⁵⁾ 郭沫若がその大分前の1936年に「党が決めたことは、私はその通りに実行する」、「私は喜んで党の声になる」と言ったことがある¹⁶⁾ のと合わせ考えてみれば、なお分かる。

3. 周恩来の引き立てと共産党の評価

1926年4、5月頃、広東大学文学部長であった郭沫若は大学に講演に来た周恩来とはじめて出会って以来、周恩来が亡くなる1976年1月まで、なんと50年も付き合った。その間、郭沫若が日本に亡命した10年を除き、北伐・南昌蜂起は共に闘い、日中戦争・第二次国共内戦時もよく顔を合わせていたし、中華人民共和国成立後もずっと一緒であった。郭沫若の二度目の入党も紹介者は周恩来であった。

1938年夏、中国共産党は周恩来の提案により、郭沫若を魯迅の継承者とし、中国革命的文化界のリーダーにするという決定を下し、それを全国党内外に広く通達した。¹⁷⁾ 要するに、共産党は郭沫若を中国の知識人のNo.1に仕立て上げたのである。これにより、共産党は彼を支配下に置くだけでなく、彼の影響力をフルに利用して、対知識人工作を有利にすることが出来るし、郭沫若の方から言っても、その名声・社会的地位が益々上がる可能性が強くなった訳である。このことの意義は国民党政権下ではさほど大きくなかったにしても、共産党が政権の座に就いてから、それも一党独裁になってからは量り知れない。

1941年11月16日、周恩来は郭沫若50歳誕生祝いの祝賀会で、「私の言いたいこと」と題して、講演をした。¹⁸⁾ 彼は郭沫若を魯迅と比較し、次のように述べた。

「魯迅が新文化運動の指導者であるならば、郭沫若は新文化運動の新主将である。魯迅が率先して今までなかった道を切り開いてくれたと言うのであれば、郭沫若は我々一同を率いてその道を進む道案内人である。」

郭沫若の素晴らしいところと言えばと言って、次の三つを挙げた。

「第一に、燃えるような革命的情熱である。……五四運動時期・創造社草創期に於いて、彼の奔放たる革命的情熱は自ずと未だ濃厚なロマンチズムの色合を帯びていたが、それこそ正に当時の若い知識人を代表する典型的なものであった。」日中戦争はじまって4年経った現在、彼は「革命的なりアリズムで以て革命的なロマンチズムに取って代った」。

「第二に、深遠で精しい研究心である。……我々の郭先生は正しく彼の歩むべき唯物論的な研究の道を歩んだのである。」

「第三に、勇敢な闘いの生活である。それ故に、彼ははじめて今日の革命的な文化の旗頭になったのである。」

1978年6月18日開かれた郭沫若の追悼会で、鄧小平は共産党・政府を代表して弔辞を述べた。¹⁹⁾ 郭沫若に対して、「共産主義事業のために終生奮闘努力した忠実な革命家であり、卓越したプロレタリア文化の戦士であった」と評した。「わが国の傑出した作家・詩人・劇作家であり、又マルクス主義の歴史家・古文字学者」の彼は「魯迅に次ぎ、中国共産党の指導の下で、毛沢東思想に導かれた、わが国文化戦線に於けるもう一つの光り輝く旗印であった」として、国民、特に知識人に、彼に学ぼうと呼び掛けた。

4.近代化に果たした役割

中国の近代化の本格的な幕開けは1911年の辛亥革命であり、1919年の五四運動及び1926年の北伐はその延長戦上にある。第一次国共合作が実現し、共産党も積極的に北伐に参加した。帝国主義諸列強の侵略、特に日中戦争により、近代化の進展は停滞するどころか、後退した。第二次国共合作により、紆余曲折しながらも、日中戦争は勝利を迎えることが出来た。国民党政権は近代化にとって欠かすことの出来ない農地改革を実施し、人口の8割を占める農民の解放を怠った或いは体質的に出来なかったためか、共産党との内戦に破れ、中国大陸を共産党に取られ、台湾に蟄居した。大陸での農地改革は共産党政権の手によって行なわれた。近代化途上の非常に重要な一歩である。毛沢東の共産党が中国近代化に果たした役割はそこまでであり、それから鄧小平が最終的に実権を握るまでの約30年間、近代化は大々的に遅れた。というよりも相当の面で逆行した。それに対し、逆に台湾は近代化を実現した。その手本的な影響もあってか、大陸も急速に近代化に向けて進みつつある。というのが20世紀に於ける中国の歩みであろうが、郭沫若が果たしてその中でどのような役を演じたのであろうか。獅子なのか、風見鶏なのか。

結論から先に言うと、一概には言えず、獅子的な時期や側面もあったし、風見鶏的な時期や側面もあったと見るべきであろう。

五四運動後に発表した「女神」等の詩集は個性の発展・解放を要求し、自由を要求するもので、当時若者たちの共感を呼び、帝国主義列強反対・封建制反対闘争への奮起を促し、彼らの前進を大いに励ました。詩人でありながら、詩作だけに満足せず、妻子を後方に残して北伐に参加し、それこそ実際の行動で以て、革命的な戦争に身を投じたことも、日中戦争が勃発するや、中国古代社会・考古学・古文字の研究等をやめ、妻と別れ、5人の子供を置いて、亡命先の日本から帰国し、国家・民族の滅亡を救うという、所謂「救亡運動」の最前線に立って闘ったことも知識人や国民に少なからぬ好影響を与えた。1937年7月24日、横浜出帆の時吟じた詩が当時の彼の決意をよく表している。²⁰⁾

又当に筆を投じて縷を請うべきの時、
 婦に別れ難を抛って藕糸を断つ。
 国を去って十年、涙血を余し、
 舟に登って三宿、旌旗を見る。
 欣んで残骨を將て諸夏に埋めん、
 哭いて精誠を吐いて此詩を賦す。
 四万万人齊しく厲を踏み、
 心を同じくし徳を同じくし戎衣を一にせん。

正に勇猛突進の獅子の役割を演じたと評価できよう。

共産党政権の成立に協力したと言っても、一概に悪いとは言えない。何故かと言うと、中華人民共和国の成立は中国が帝国主義諸列強の覇権、半植民地状態から脱し、独立国家として立ち上がった訳で、国民に誇りと勇気を与え、国造りへの意欲と決意を昂揚させた。成立前後に実施された農地改革も強制的で、一部の人たちを恐怖のどん底に陥れはしたものの、圧倒的多数の農民から自分の田圃や畑を持つという夢が叶えられたと言って、歓迎され、支持された。知識人も「裏切られる」とは露知らず、手放しで喜び、光明・春の到来を感じ、連帯結束し、仕事や研究に精を出しはじめた。郭沫若の名声がうなぎ登りに上がったのは言うまでもない。

然し、喜びも束の間に終わり、暗黒・冬の時代へと一変した。農民は暖まる暇もなく、その農地は取り上げられてしまい、貧困状態に逆戻りし、知識人は苦難の道程へと足を踏み出し、鋭気も力も失ってしまうのである。郭沫若はこの辺りから約30年間、民主・自由の扼殺、知識人の弾圧に先頭に立って助勢する訳である。正にゴロツキ、風見鶏としか言いようがない。彼はプロレタリア文化大革命中に二人の息子が迫害を加えられ、失っている。周恩来に会う機会もあり、一言言えば助かるはずであったのに、自分の地位を失いたくないがために、遂に死なせてしまった。悪いが、言わば自業自得である。

このゴロツキ或いは風見鶏の側面はマルクス・レーニン主義や社会主義理論を生嚼りした若い時から既に現れているのは前述した通りであり、それと性格が原因でそうなったとも考えられる。

いずれにしろ、郭沫若の影響力は小さくなく、その言論や行動は国民、とりわけ知識人に多大の好か悪かの影響を与え、共産党の情勢判断・政策決定にも何らかの影響を与えたのは確かである。後者の場合、主に知識人政策と対日政策であることは容易に想像できることである。

II. 日本との係わり

1. 日本滞在歴20年

郭沫若は1914年1月から1923年3月まで日本に留学し、相前後して東京一高予科・岡山六高・九州帝大医学部で勉強し、1928年2月から1937年7月まで亡命し、千葉県市川市に居を構えている。その間何回も日中の間を行ったり来たりしているが、とにかく合計20年ぐらいは日本に滞在した。日本・日本人に詳しいだけでなく、その影響を相当受けた。

その頃の「青少年は殆どみな一人一人が国家主義者であったといつてよかった。当時の標語はいわゆる『富国強兵』で、少しでも志のあるものは、誰でも何か実際の学問を勉強して国家を強盛にしようと考えており」²¹⁾、彼も「現状に不満なばかりに、毎日四川を離れたいと思っていた。そのころ最高の理想とした目標は、ヨーロッパ、アメリカに留学することであり、そのつぎが日本、さらにそのつぎが北京、天津、上海だった」²²⁾。彼は小さい時から詩が好きで、文学的傾向にあった。留学してからはこの傾向を克服しようと努力したが、インドの詩人タゴールの作品に接し、ゲーテやハイネに接近し、そこからスピノーザの著書を読み漁った。その汎神論的思想に共鳴し、子供の時から好きだった「莊子」を再発見した。「又ホイットマンの『草の葉』と接近

しはじめ、彼の豪放な詩の調子が僕の闇をきった詩作欲に暴風のような扇動を受けさせた。……1919年から1920年にかけての何ヵ月間、僕は殆ど毎日、詩的陶醉の中に在り、詩の発作が襲来するとまるで熱病にかかったように、寒気がして来て、僕は筆を取り上げて顫えながら、時には字を書くことさえ出来なかった。」²³⁾「女神」の主な詩はみなこの時に書かれたものであり、「フェウスト」の翻訳も同じ時で、ゲーテ及び当時流行していた新ロマンチズム・表現派の影響を強く受けた。

大正デモクラシーも第3期に入り、民衆の政治的自覚や社会的平等への要求が高まり、社会主義の影響力が增大する中で、郭沫若の「以前の汎神論的思想、いわゆる個性の発展、いわゆる自由、いわゆる表現などは、いつのまにかはくの脳裏ですでに清算されていた。これまで意識の辺縁に在ったマルクス・レーニンがいつしかスピノーザやゲーテを押しつけて、意識の中心を占拠していた。1924年の初頭、レーニンが死んだ時、僕は心から悲しみを感じ、太陽を失ったような気がした。だが、マルクスレーニン主義に対して僕は決して明確な認識を持っていたわけではなく、そうした思想の内容を検討してみたいというのは、僕の当時抱いていた一種の憧憬であったのだ。」²⁴⁾

遂に1924年5月に河上肇の「社会組織と社会革命」を翻訳するに至るのであるが、それによって、「社会経済に関する僕の認識を深めることが出来たばかりでなく、同時に生まれた副作用は、僕が文芸に対しての別の見解を懐くようになったことである。」²⁵⁾そして、その後彼自信が言うように「マルクス主義者になった」²⁶⁾訳では決してないが、マルクス主義の方に転じて行ったのは事実で、彼の思想の形成・転化は全て日本留学中になされたのである。

亡命の10年の間に、彼は精力的に中国古代社会、甲骨文、殷周青銅器銘文、两周金文、古代銘刻の研究に取り組み、多くの論文を発表し、著書を刊行した。その他に又「わが幼年」、「反正前後」、「黒猫」、「創造十年」、「北伐」、「亡命十年」等の自伝的な小説、創作も出版した。シンクレアの「石灰王」、「石油」、「屠殺場」、トルストイの「戦争と平和」、ミカエリスの「美術考古学発見史」、マルクスの「経済学批判」、「ドイッチェ・イデオロギー」やHerbert George Wellsの「生命の科学」、「人類展望」等の翻訳も刊行するが、その大半が発禁となる。周恩来は彼のこの10年を評して、「彼は又革命の退潮期にも如何にして自分自身の活力を保つべきかということを知っており、研究に没頭し、自己充電を図った。……その翻訳・創作の豊富なことと言ったらなかなか、人の及ぶところではない」と語っている。海外に身を置きながらも常に国内の文壇に関心を持ったのは言うまでもないが、猛烈な魯迅批判の文章を書いたのもこの間である。友人の「魯迅の最近の作品を読んでいるか。」という質問に対して、「読んでいない」、「読みたいか。」の質問に、「読みたくない。」と答えているし、²⁷⁾魯迅が亡くなった時も弔電を打たなかった。

2. アンナ

1916年夏、郭沫若は東京のアメリカ人が経営する病院で看護婦をしていたアンナと知り合った。そして、12月に岡山で同居するようになる。アンナの本名は佐藤富子と言い、仙台の出身で、実家は仙台藩の士族で、祖父の代には剣道指南番の職に就いていた。父は若い時は下級の士官であったが、後にキリスト教の牧師を勤め、子供6人で、アンナは第一子であった。郭沫若とのことを父はものすごく反対したが、アンナはそれを押し切り、家族と縁を切って一緒になった。それ

から、1937年7月、郭沫若が日本から帰国するまで21年間生活を共にし、その間5人の子を設けた。

留学時代は郭沫若の官費で生活し、卒業してからは創造社から毎月もらう金やら原稿料で生計を立てた。郭沫若は日記や文章に次のように書いている。

「アンナ、生活費のことで仿吾といい争いをする。アンナは創造社に毎月百五十元出すようにいうが、仿吾は百元しか出せぬという。私は生活していけばさすれば、百元でも充分で、社をからっぽにはいけないといった。アンナは、社中の仕事をする人はただ働きをし、飯を食う人はただ飯を食っているという。帰宅後もこのことで半日不愉快だった。」²⁸⁾

「僕の日本人の妻は、上海に来て以後、殆ど朗らかな日はなかった。生活はむろん彼女が想像していたような『幸福』とは全然背馳していた。三番目の幼児の消化系統の疾患は、実際最も大きな負担であった。……中国人の医者も外国人の医者も一人として信頼できる者はいなかったし、医療費も目がとび出るほど高かった。金のある人なら何でもあるまいが、奴隷プラス乞食の生活をしている人間にとっては、電車賃にさえいつも不自由していた。妻はそのためしじゅう日本に帰りたいとやかましく言った。」²⁹⁾

1927年2月、創造社が当局によって閉鎖されてからは、百元も途絶えてしまった。「アンナの生活のやりくりは極端なまできりつめたもので、来日以来ずっと家政は彼女ひとりできりまわし、煮炊き、掃除、洗濯、縫いかえし、さては他人とのつき合いに至るまで、一切合財彼女にたよっていた。当時子供たちはまだ幼く、費用もそれほどかからなかったので、毎月の百元のうちからいくつかずつ余っていたが、これが私たちが間接に受けた不意の打撃を解決してくれたのである。しかし、私の古代史研究は、もはやつづけられなくなった。研究以外に、私は生活のことを考えなければならなかった。こうして私は、私の力を著作と翻訳に移した。」³⁰⁾

郭沫若が職に就けた場合でも、アンナは中国での生活に慣れないだけでなく、又移動が激しいので、落ち着かない。1926年3月、郭沫若が広東大学に就任した時、アンナと子供4人は上海に残り、2ヵ月遅れて広東に行った。彼が北伐に参加した後、アンナたちは子供を連れて上海経由で武漢まで逃げた。そこも危なくなり、又しても上海に逃げ戻るといような子連れの流浪の旅を続けなければならなかった。アンナはよく耐えたものである。

「彼女の性格は僕より強く、一旦決心したとなると、テコでも動かず、僕が動揺している時に、反って彼女は既定の計画を実行するよう僕を激励するのであった。」³¹⁾

それは子供のことで、いらいらすることもあったであろう。「アンナのヒステリーもあまりひどく、ともすると打ったりどなったりして、はなはだおもしろくない」³²⁾と思う夫の方が身勝手である。人との付き合いもそうしっくり行かない場合もあったであろう。「もともと社中の同人はみな文学ずきの青年男女で、ロマンチックな人間ばかりだが、アンナは何事にも干渉しようとし、言語がちがうところから、意見も疎通を欠き、その結果どうしてもしっくり行かなくなるのである。」³³⁾ 夫婦喧嘩等決して珍しいものではない。「小さな肩掛のことでアンナと私と大喧嘩する。」³⁴⁾ と、郭沫若は日記に記している。「湖心亭」という小説を読むと、ひどい時など、「もう手を着る！別れる！おまえ、日本に帰れ！」とまで言っているように見える。

郭沫若は南昌蜂起が失敗して逃走する途中赤痢にかかるが、それを心から世話をしてくれた安

琳という教え子と親しい間柄になる。それに就いて、夫婦の間で交わした会話がある。³⁵⁾

「あなたは彼女を愛しているの？」

「むろん愛している。私たちは同志だし、それに患難を共にして来たのだから。」

「愛しているなら、なぜ結婚しないの？」

「愛しているからこそ結婚しないのだ。」

「わたしがあなたがたを邪魔しているからでしょ。……かりにこんなにたくさんの子供さえいなければ、わたしはいつでもあなたを自由にさせられるのだけれど。」

1937年7月24日の晩、郭沫若は帰国する意志をアンナに話す。その時、彼女は、「脱出するのは結構だ、ただ私がつらつき易い性格であることだけが、一番心配だ。私さえ真剣になりっぱなし生き方をしてくれれば、たとえ少し面倒なことがあっても、じっと耐えよう。」と答えた。³⁶⁾

アンナが言った郭沫若の「つらつき易い性格」とは、詩人のような、ロマンチックで、感情豊かな男は女性に溺れ易い、或いは「英雄色を好む」を指して言ったのかれ知れないが、もしかしたらそれは政治・思想・学術にも現れているのかも知れない。

案の定、郭沫若は帰国後半年も経たない1938年1月から于立群と同居しはじめる。1939年晩春初夏の頃、二人は重慶にて所謂結婚式・披露宴を兼ねた祝賀会をやる訳であるが、その会を司会したのが周恩来である。1978年郭沫若が亡くなるまで40年間暮らしを共にする。

郭沫若にとって、これは重婚になる。彼は1912年の旧正月に既に両親に言われて張瓊華という女性と正式に結婚している。彼は「黒猫」という作品に初夜のシーンを次のように書いている。³⁷⁾

『「だめだ、こりゃいかん！」私は心中またしても声をあげた。私には何も見えなかった。ただ空を向いたしょうじょう鼻だけが目の前にあった。まことに俗諺はいみじくもいったものである。『袋の中に入れた猫、白いと聞いて買ったのに、帰ってあげれば黒い猫。』』

郭沫若は張瓊華と合計百日余りしか一緒にいなかった。彼の両親が亡くなって、遺産相続の彼の分の田畑は当然のことながら彼女のものになった。ところが、農地改革でそれらの田畑は全部没収され、彼女は衣服や家具・食器の類を質に入れながら暮らすしかなかった。到頭それも底を突き、彼女は自分でちょっとしたお菓子や子供の履く靴・帽子を作って売っては糊口を凌いだ。親戚が見るに見兼ねて、北京で高官になっている郭沫若にその事情を知らせた。それでようやく生活費として毎月15元送ってもらえるようになった。物価が上がるにつれ、徐々に20元、25元、30元と増やしてもらった。³⁸⁾ 因みに、その頃、筆者は北京大学の学生であったが、毎月家から30元送金してもらっていた。父はそれこそ郭沫若が院長を勤める中国科学院の学部委員（日本の学士院会員に相当）及び復旦大学の教授であったが、月収は両方合わせて720元であった。国家公務員最上級の毛沢東が560元である。郭沫若は給料の他に印税収入も随分あったはずである。彼は水害罹災者たちに2万元、大学に1万元と寄付もしていれば、共産党員が毎月党組織に収める党費として一度15万元渡したことがある。

1939年7月、郭沫若の父が亡くなった時、彼は于立群と生まれたばかりの子供を連れて帰省し、前後して4ヵ月程滞在した。³⁹⁾ その際、結婚以来ずっと舅姑のところに住んでいた張瓊華は自分から進んで結婚当時より使っていた寝室を郭・于の二人に譲った。風俗慣習により、忌中は精進料理しか食べられない。ところが、于は産後3ヵ月の体、是非とも栄養を取る必要があるという

ので、張瓊華は特別に小さな籠を作らせ、又鶏とか魚を買いに行かせ、裏口から持って入らせては自ら料理して、于に食べさせた。于は若奥様然としてまるで女中のようにして働く彼女が作ってくれた御馳走を食べた。その間、張瓊華は田舎者なので、子守歌など歌えない。ただ「おおお！おおお！」と言いながら、赤ちゃんを抱っこしてあやした。筆者は資料のこの件を読むたびに目頭が熱くなると同時に憤りを感じる！

3. 寛大な日本人と東洋文庫

郭沫若自身が述懐するように、⁴⁰⁾ 1928年はじめの日本への亡命は何もかも非常に順調に、自分でも不思議だと思えるほど順調に進んだ。

1927年12月7日、郭沫若は突然発疹チフスにかかる。翌年の2月頃になって、快復する訳であるが、彼と同じ時期に同じ病気にかかった友人の桂毓泰博士の夫人斎藤花子は死んでしまう。桂博士は彼と同期で、京都帝大医学部を卒業していた。又、郭沫若が広東の大学で文学部長をしていた頃、桂博士も同大医学部に勤めていたので、アンナは花子夫人と付き合い、同国人の誼みもあって、特別に親密で、姉妹同様にしていた。郭沫若はその病気で、結局当初予定していたソ連行きは出来なくなり、日本へと向かう。日本と言っても、アンナは親から勧告されているし、郭沫若もこれといった親しい友人はいない。それで、アンナの咄嗟の思付で、亡命一家は花子夫人の実家を頼って行く。

齋藤家は中流以下の家で、父は大工の棟梁で、貸間を兼営していて、中国人留学生が何人か住んでいた。二人の老人は非常に親切にしてくれ、母などアンナを見て、自分の娘が生き返ったと思っているかのようであった。とにかく郭沫若一家は路頭に迷わずに済んだ。

次は居留できるかどうかの問題である。郭沫若は大衆文学作家の村松梢風に頼み込む。村松梢風は懇ろに彼とアンナを迎え入れ、親身になって彼の書き物生活や子供のことを考えてくれ、東京に隣接する市川に住むよう提案し、そこの剣道の達人である横田兵左衛門という人を紹介してくれた。その人も又義侠性に富んだ人で、快く世話を見ることを承知し、同窓生で、東京の思想検事の首席をしている平田薫に頼んでくれた。平田検事は市川の樋口検事を紹介してくれた。その樋口検事の案内で警察署長に面会に行き、万事解決した訳である。

8月に東京警視庁に拘留されるが、3日後に無事帰宅する。横田兵左衛門は「私の翼があんまり小さすぎたので、『駝鳥の卵』であるあなたを覆いきれませんでした」と謝ったが、彼は彼なりに最善を尽くした。それ以降、憲兵・刑事の監視は続くし、周りの日本人のアンナを見る目、「なんて、あんたは馬鹿なことをしたの。日本の女のくせに、支那人の女房になるなんて、しかもあんなできそこないのさ！」⁴¹⁾ という警戒と軽蔑の目はアンナにとって耐え難いものであったろうが、それ以外は大した事もなく、10年過ごすのである。

上海で日本と関係があり、日本の学問を研究している人はみな内山書店に出入りし、内山完造を知っているし、彼は心から魯迅や郭沫若を助けてくれた。それとまったく同じではないが、東京で中国の学問を研究する人で、文求堂とその主人田中慶太郎を知らない人はいない。「彼は小学校さえ出ていなかったが、中国の版本についての異常に豊富な知識という点では、なみたいていの大学教授や専門家をはるかにしのいでいた。」⁴²⁾ 郭沫若は彼を訪ねて行き、懇意になる。そして、彼に教えてもらい、東洋文庫を利用することが出来るようになる。東洋文庫は当時日本の

支那学の東京学派の大本営であったが、京都学派と違い、中国人は固有の文化を持っていないと見、郭沫若が興味ある甲骨文や金文は無価値のものと判断し、蔑視していた。それでそこに収蔵されていた豊富な資料を思う存分利用することが出来た。例えば、王国維のものだけでなく、アンダーソンの甘肅・河南などの彩陶遺蹟の報告とか北平地質研究所の北京人に関する報告等、およそ中国国内の考古学上の発見報告は殆ど読み尽くした。一部の論拠・論点にはなお検討する余地があるにしても、それらを基に彼は研究を成就させたのである。

要するに、日本は郭沫若の人間形成に決定的な影響を与えただけでなく、学者としての名声・地位を不動なものにしたと言える。

Ⅲ. 日本という国

1. 日本人のルーツと日本の開化

郭沫若は「日本民族発展概観」⁴⁹⁾で、題名通り日本民族の由来・発展を概観している。新しい考古学の発見により一部の論点は修正する必要があるが、1942年当時としては大まかなところは合っていよう。

日本には旧石器時代がなく、新石器時代になってはじめて人間が現われた。恐らくシベリアあたりから来たアイヌ民族である。その後、主に南洋の方から渡ってきた。衣食住の生活様式を見れば分かる。衣生活で一番本質的な習慣は男女ともパンツを穿かず、女性は腰巻、男性はそれに又褌も着けていた。食生活では、豚肉やマトンを食べず、多く魚介類を食べていた。住居は周りに壁がなく、カーテンみたいなものを垂らしているだけで、防寒のことは考えなかった。その他に、例えば、既婚の女性のお歯黒の習慣や便所のことを厠と呼ぶ、つまり川に沿って建てる建物「河屋」というようなところ等みな南洋と同じである。朝鮮や中国からも渡って行ったであろう。紀伊に徐福の墓があると聞かすが、彼はべてん師で、必ずしも日本に行ったとは限らない。日本人は昔非常に中国人の末裔子孫になりたがっていた。但し、渡って行った朝鮮人や中国人の人数は少なく、下層階級の人たちが多く、日本の開化を促すには至らず、三国や隋の時代になっても日本民族はまだ原始的な民族であった。「魏志倭人伝」に女性は貫頭衣を着ていると記されているが、どの民族、どの時代に於いても女性の服装はその時の文化の最高レベルを表すもので、当時日本の遅れぶりが推測できよう。それまで頭には何も被らず、裸足のままであったのがようやく冠や履物を使用するようになったとも書かれている。

隋や唐の時代に入り、日本は大勢の僧侶や学生を中国に派遣し、中国の文化を何から何まで学んで行くようになる。漢字がそうである。そして、片仮名や平仮名を作る。俳諧・和歌の五音句七音句も明らかに中国の五言七律の影響を受けて作られたものである。とにかく、社会の土台である生産方式・生産関係、農工商の経営から上部構造の政治・思想・文芸、何一つ取っても中国の影響を受けていないものはない。日本は青銅器の時代を飛び越えて、石器時代から直接鉄器時代に入ったということも、殆ど白紙の状態から中国の高度な文明に接し、開化した、言わば日本は全体が中国文化の分れ枝と言える。多くの日本在来のものと言われているものも、突き詰めれば、その起源は中国にある。褌も刺身もみなそうである。

但し、それと同時に、日本は又中国文化のいいものを相当保存し、それに磨きをかけてきた。中国文化が大自然の景勝の地であるならば、日本は人工的な花園である。スケールの大小、迫力の強弱、美意識の雄大と優美、全体の粗雑と精巧の違いがある。例えば、唐の時代の宮廷音楽や舞踊は中国での伝承は途絶えたが、日本は保存してきた。「魏志倭人伝」に書いてあるように、古代に於いて、日本人は綺麗好き・入浴好きでなかったが、開化以降は綺麗好きになり、風呂に入るのが好きになった。

ところが、日本も中国と同じように、自分自身で封建制から脱皮する力がなく、半植民地になってしまった。16世紀半ば、キリスト教が伝わってき、ポルトガル人・オランダ人が貿易通商に came。続けて、英米の武力威嚇による通商・租界の割譲・不平等条約の締結及びヨーロッパ文明に対して、はじめは無視、次は敵視、しまいには崇拜と考えや対応が変って行く、これも中国と同じである。

日本が西洋文明を導入するはじめの頃には、中国の協力を受けた。文明の伝搬は往々にして宣教師が先導するものであるが、日本のクリスチャンが最初に使った聖書は中国語から翻訳したものであった。事実、明末には西洋の暦法を使い始めていたし、宰相である徐光啓は自らユークリッドの「ストイケイア」を中国語に翻訳し、西洋の天文学や数学との接触は日本より早かった。

2. 東洋の奇跡

郭沫若は続けて、文明開化・明治維新に就いて、概略次のように述べている。

日本は異教を敵視した結果、何回かひどい目に会い、封建的な文明では科学的な文明に対抗できない。維新を図る道しかないと悟り、敵視から歓迎・崇拜と方針転換する。そして、不平等条約の束縛から抜け出し、半植民地状態から脱出し、国家社会主義に対して言う個人資本主義を採用して、何十年かの間に近代国家へと変身する訳である。そのスピードから言って、これは正に奇跡である。

「日本の明治維新が成功を収めた所以は、治人治法の両方とも宜しきを得たことが、まことに否認すべからざる因数であった。」⁴⁴⁾ 日本の明治維新時代は立派な人が多かったし、法律も厳明で、憲法など早くから頒布され、人々はそういった法を守ったために、国事が容易に軌道に乗った。というのも、もちろん間違いではない。但し、それは内因であって、外因も必要である。そして、郭沫若はそれらをまとめて、奇跡・成功の原因を中国と比較しながら分析するのである。

第一に、日本は国土が狭く、植民地の価値が割合低いのに対して、すぐその傍に国土が広く、資源・物産が豊富で、広大な市場を有する、植民地的価値の高い中国があった。その結果、世界の資本主義国は日本にそれほど注意せず、専ら目を中国に向けた。中国は日本の盾、目を逸らせる役割を果たしたのである。

それだけでなく、日本自身にとっても中国は最大の市場であったし、無尽蔵に近いほどある原材料・労働力の供給地でもあった。

第二に、日本の国内には障害物が比較的になく、反対勢力が弱いのに対して、中国はそれが非常に多くて強い、清朝260年の支配は国の発展の上での極めて大きな障害であった。特に清末には益々保守的な方向に向かい、帝国主義列強と結託して革新勢力を反乱者の一党と見て弾圧し

た。日本はちょうど逆で、封建的な保守勢力は徳川幕府で、人臣の地位にあり、革新勢力は皇室を護持し、言わば天子を擁して諸侯に令する立場にあったので、逆臣を討伐するということになる。

第三に、日本人は確かに努力した。日本人は努力して苦勞に耐え、一意専心に目標を目指して頑張った。この点を認めない訳には行かない。

このようにして、アジアではただ一つ近代化に成功し、先進国入りするようになるが、順調に行った分だけ、上り坂を速く登った分だけ、下り坂から滑り落ちるのも速かった。日本が封建制の社会から資本主義社会に脱皮したばかりの時は、その全ての努力は積極的で前向きで進歩的であった。その対外の戦争もそうであった。日本の新興文化は大々的に進歩発展し、世界の人類にも貢献した。日本人の科学の発明・発見に於ける業績も大したものであった。医学だけでも世界的な研究をした。ところが、日露戦争以降、日本は徐々に侵略的な帝国主義国へと変わって行った。

3. 恩知らず

日中戦争勃発後間もなくの1937年8月、郭沫若は「我々はなぜ抗戦するのか」⁴⁶⁾という文章で、怒りを込めて、「東洋にその数少なくない一群れの狂犬が現れた。それはつまり横暴極まりない日本の軍人である。」というその軍人及び日本人を「恩知らず」と批判した。

「我々中華民族は平素から平和を愛する民族である。我々の先祖は我々のために4千年の文化を築き上げてくれた。それは仁義を大本とする文化である。我々はこの文化を贈り物として日本にプレゼントした。そのおかげで、日本は千年も前から原始的な状態から脱出でき、我々と同じレベルに達することが出来たのである。……この文明を欧米民族は又贈り物として日本にプレゼントした。そのおかげで、日本は50年前に封建的な状態から脱出し、欧米人と同じレベルに達することが出来た。然し、日本人、狂暴な軍部統制下にある日本人が我々に返してきた贈り物は何であろうか。文明を破壊し、人類の福祉を無残にする飛行機や大砲、毒ガスや細菌である！」

4日後、「世界の友人に告げる書」⁴⁷⁾で、再び次のように批判している。

「我々は只我々が歴代に亘って創り出した文化を贈り物として近隣の兄弟民族にプレゼントしただけである。日本民族は我々の贈与する主な相手であった。彼らは我々の文化の洗礼を受け、千年前に原始的な状態から脱出し、我々と同一レベルに達したのである。ところが、口を開けては「東アジアの平和を守ろう」と言うその日本軍部が我々に返してきたものはどんなものであろうか。誠に感謝すべきものではないか？ 飛行機・大砲の爆撃、毒ガス・細菌の毒殺！」

そして又その4日後、「理性と野性との戦い」⁴⁸⁾で、続けて、次のように批判した。

「彼らの文字・思想・芸術・社会組織の仕組み・生産方式などその源はみな我々である。何千年以来日本はほしいままに我々の恵沢に浴してきたはずである。……しかし、日本は我々のこの何千年と続けて贈ってきた贈り物に対して何を返してきたであろうか。日清戦争から今まで次から次へとわが国を侵略し、此の程横暴極まりなき絶頂に達したのである。……日本人は彼らの野性を余すところなく露にし、世界文化を踏み躪っている。」

「昔の日本が我々に感謝すべきであることは言うまでもなく、今の日本も多かれ少なかれ我々に感謝すべきである。」⁴⁹⁾と述べて、日本は解決できるはずがない土地の問題を抱え、イギリス

のように、農業をあきらめ、専ら工業や貿易で行くしかない。ところが、日本は資源に欠乏している。特に、産業の主な原料である石炭と鉄が足りない。大量生産するには大量消費を有する大市場が必要である。それも日本にはない。要するに、「我々中国との間の平和及び親善は日本が資本主義を維持する主な一環である。」彼らは我々に協力を求めてきたし、我々もこの何年か黙って彼らの数々の問題を解決してやってきた。それなのに、彼らは貪欲この上なく、なんと我々民族の生存まで脅かそうとしているのである。いくら我々が寛大であろうと、この残忍さにはもう堪忍袋の緒が切れた。

1931年の満州事変で日本は中国の東北地方を侵略し、1932年の上海事変で上海を踏み躪り、続けてその魔の手を熱河・河北へと伸ばし、1937年7月7日には支那事変を起こし、日中戦争に突入した。華北への爆撃だけでなく、華南への爆撃も続行されている中に書かれた書⁵⁰⁾で、郭沫若は次のように指摘している。

「日本軍部の野心は止まることを知らない。彼らの所謂『大陸政策』は完全に中国全土を占領しなければならないと、公然と大胆に表明している。彼らの中国を併呑するという企みは既に四五十年前から温めてきた。」彼らは彼らの陸海空軍は世界で無敵と判断し、又スペイン内戦で、文明諸国がそちらに気を取られ、極東にまで出す力も余裕もないのを幸いに、それこそ千載一遇の好機会ととらえ、全武力で以て中国に攻め寄せてきたのである。

これは本性を丸出しにし、「生命線」とか「皇軍の威力」を叫びながら飛行機・大砲で攻撃してきた武士の顔と姿である。日本はこの地にもう一つの顔と姿を持っている。芸者の顔と姿である。⁵¹⁾「同文同種」とか「共存共栄」とか「日中親善・共同防共・経済合作」の三原則で「東亜新秩序」を構築するとかの美辞麗句を口にした日本である。

日本の政治家の中で硬骨の人、例えば浜口幸雄・犬養毅・井上準之助・団琢磨・斎藤実・高橋是清等はみな軍部に殺害された。只一人の元老である西園寺公望公爵も政党が機能なくなり、軍部の勢力が膨張するようになってからどれくらい頭を痛め、苦労したか分からない。はじめは海軍で以て陸軍を牽制しようとした。斎藤実・岡田啓介の組閣がその表れである。二・二六事件後は陸軍内部を分裂させようとしていた。宇垣内閣の流産、林内閣のような奇形児の誕生がその表れである。それも失敗に終わり、最後の手として、彼の秘蔵っ子と言われる近衛文磨を担ぎ出した訳であるが、意に反して、近衛文磨は軍部のロボット・代弁者になってしまった。⁵²⁾

軍部は最初中国で以て中国を制し、中国人で中国人をやっつけようとしたが、失敗し、自ら出動せざるを得なくなったし、日本の諸条件からして速戦即決の方針を採らざるを得ず、それで臨んだが、泥沼に陥り、持久戦になってしまった。⁵³⁾

日本はこの戦争に絶対に負ける。何故かというと、「日本軍部の凶暴はその経済を土台にしているが、日本経済は中国に頼り切っているのである。中国は日本経済の息の根を止めることが出来る。従って、日本軍部の息の根を止めることが出来るのである。」⁵⁴⁾「彼らの経済の基礎の大半は我々中国というこの世界的な市場にある。彼らが我々を搾取するにはどうしても平和的な環境が必要である。戦争は彼ら自身の産業を破壊しただけでなく、彼らの市場をもだめにしてしまった。つまり、これは日本の自殺的な行為と言える。……日本経済の死活を握っているのは我々である。従って、日本軍部の死活を握っているのは我々ということになる。……我々が長期的抗戦

することによって、日本経済全体を崩壊させれば、日本軍部を滅ぼすことが出来るということである。⁵⁵⁾次に、「日本人がとりわけ馬鹿であるのは、わが軍の力しか知らず、わが民衆の力を知らないということである。……民衆の協力のない武力だけでは断じて勝利に導くことは出来ない。……愚かな日本人は全世界の平和を守る力も知らない。」⁵⁶⁾というふうに、郭沫若は日中戦争中時局にも大変な関心を持ち、それを検討・分析・判断し、書き続け、国民や世論に訴えたのである。

4. 日本社会の階層

郭沫若はマルクス・レーニン主義者にはなれなかったものの、その理論を少しは蓄っているもので、階級的な分析方法で物事を見ることはある程度出来る。彼は日本社会の階層に就いて、「海濤集」の「東海を越えて」⁵⁷⁾で、次のように紹介している。

「明治維新以後、封建的藩主制を改革したが、氏族の上では依然として皇族・華族・貴族・士族の分を保持している。皇族は天皇の族系であり、華族は皇族の近親であり、貴族は旧時の藩主の後裔および新封建の公侯伯子男などであり、士族は旧時の武士の子孫である。名義上四族平等ではあるが、同族でない者の間では、普通結婚を通じない。

この四族のほかに平民があり、平民のほかに新平民がある。この新平民は一般人からは犬や豚と同じに視られている。俗間の悪語でこれを『ヨツ』と称している。つまり『四つ足』という意味である。

日本の社会にいわゆる水平運動なるものがあるが、これはこれらの新平民の組織する人権運動なのである。

日本人の新平民に対する蔑視は、おそらくアメリカ人の黒人に対する蔑視とだいたい同じである。新平民は事実上選挙権も被選挙権もない。向かい合って住んでいても、たがいに挨拶しない。はなはだしいのは新平民の坐った腰掛には坐りたがらず、新平民の使った碗を使うのを嫌う。これらの忌避は、われわれ中国人から見れば、いささか不可思議のようだ。

では新平民はいったいどんな人種なのか？実は通常の日本人と少しも区別はない。あるのはただこの社会階層の属性だけである。

だが士族と平民の間の境界線はそれほど厳しくなく、たがいに通婚できる。これはあるいは明治維新の唯一の社会変革なのかもしれない。士族と平民から昇って貴族になることができる。だが平民から昇って士族になることは永遠に不可能である。というのは爵位の上ではもはや武士という段階はないからである。」

日本人ではない在留外国人である朝鮮人に就いても、郭沫若は「帰去来」の「鶏の帰去来」⁵⁸⁾で観察している。

1923年の関東大震災で、東京は壊滅したが、10年間の再建で、一躍世界第二の大都市になった。その東京を建て直した、というよりも生み出したのは、大震災当時日本人に大々的に虐殺された朝鮮人である。彼らがやらせられる仕事と言えば、土木建築のような重労働で、待遇は非常に悪い。そして、いつ何時でも失業が待ち構えている。正に牛馬の如く、否牛馬にも及ばない奴隷である。家族を養うことも出来ないのに、況して教育を受ける機会など勿論ない。

5. 日本語の敬語

郭沫若は、大人になってから、たとえ外国に何年いてもその国の言葉に精通するのは無理で、日本語で文章を書くのは苦手だと言っているが、会話は相当出来るみたいである。日本の刑事から、あなたの「日本語が実に達者だ、まるで日本人と変わりはない」と賞められたことがある。⁵⁹⁾ 事実、彼は日本語の敬語にも注目している。

郭沫若は東京の警視庁に3日間留置されたことがあるが、訊問に当たった外事課長の日本語に就いて、彼は次のように述懐している。⁶⁰⁾

「彼は第二人称の『キミ』という称呼で私を呼んだ——彼が『オマイ』という称呼を用いなかったことを感謝する。日本語の第二人称には等級がある。人を尊敬するときには『アナタ』と称し、軽蔑するときには『オマイ』という（ときには愛称にもなる）。平等視するときには『キミ』という（学生はお互いによくこれを用いる）。だが私たちは初対面で、彼が敬称を用いずにこの平等の称呼を用いたのは、実は軽視しているのだ。だから私の方でも彼を『キミ』ということにした。」

「日本人の日常用語と人称には、尊卑の間に著しい隔りがある。同一の意味をもつ言葉であっても、長いえばいほど、また費やす言葉が複雑になればなるほど、相手に対する尊敬と自己卑下とを現わすことになるのである。人称はというと、同じ『你』という言葉にも、何種類もある。官位をもっている人に対しては、文官なら勅任官以上、武官なら少将以上は、一律に『閣下』と呼ぶ。私は、政治部にいたころ、中将待遇を受けていたので、彼らは私を本当の武官と思ひ込み、習慣どおりに『閣下』と呼んだ。私にはそれがいやでたまらなかったが、彼らにしてみれば、それが当然の習慣であったのである。」⁶¹⁾

ここで言う「彼ら」とは当時郭沫若の監視に当たっていた刑事のことである。

郭沫若は日本の高等学校の外国語教育に就いても書いている。⁶²⁾

「日本の高等学校の授業は、半分乃至半分以上は外国語を学ぶことであって、第一外国語と第二外国語がある。ことに僕たちのように医学志望の者は、第一のドイツ語、第二の英語の外に、第三としてラテン語があった。一週間の外国語の時間は二十二、三時間以上だった。」

外国語教育の教員・教材・教授法に就いても、日本は中国と全然違う。

「非常に変わっていて、彼等は特に訳読に重きをおく。外国語を教える先生は大抵みな帝大出身の文学士で、もともと決して語学の専門家ではない。又学生の志望している科学について素養があるわけでもなく、彼等はよく文学上の名著を選んで読本とすることにしていて。授業の時の様子も特別変わっていて、先生が解釈してくれるのではなくて、学生が解釈するのだ。先生はただ某々の学生を指名して起立して原書の一節を読ませ、つづいて日本語で翻訳させる。訳が間違っている時には、外の学生に訂正させるか、或いは先生自身で訂正する。つづいて又次の学生を指名して読ませ、訳させる。当てる方法は、ある先生は席順に当てるが……。ある先生は全然順序も何もなく、手当たり次第に当てる。だから学生の自習時間は殆ど辞書をめくる時間だといってもいい。」

この時から既に1世紀近く経っているが、日本の外国語教育は旧態依然である。

6. 日本の文化侵略

1940年7月、郭沫若は「3年来の文化戦争」という文章を発表し、日本の対中文化侵略に就い

て詳しく述べている。⁶³⁾

日本の中国に対する文化侵略は日中戦争が勃発する何十年も前から既に始まっている。1905年、上海に東亜同文書院を設立し、多くの中国侵略の人材を養成すると同時に、中国の奥地にまで浸入し、数々の調査を実施し、スパイのネットワークを張り巡らした。日本の外務省にある対支文化局というセクション或いはその後拡大して出来た興亜院の文化部は対中文化侵略の大本営である。更に、1900年の義和団事件の賠償金で、上海に自然科学研究所を作り、北京に文化研究所を作って、中国の貴重な資料や値打ちのある文化財を掠奪した。その他の中国に設けた公私両方の各種機関やその特派員を使つての文化の窃盗は計り知れない。

何十年この方、日本は中国侵略を重要な国策としてきた。日本の教育体系全体が中国に対する文化侵略の体系である。そのような教育の下で養成された日本人は殆どみな中国を侮辱し、中国を侵略することをその天職と思っている。中国が派遣した留学生もそのような教育を受け、一部の留学生には中国侮辱・中国破壊の傾向が見られるし、満州事変が起こってから自分の国を裏切るようなことをやる者さえ出てきている。

日中戦争勃発直後、日本は軍事侵攻と同時に、文化に対しても空前絶後の破壊と掠奪をしかした。大学を除く各種学校の損害だけでも1億8千379万6千864元に達している。図書の影響も絶大である。北京から20万冊、上海から40万冊、天津・済南・杭州から10万冊掠奪され、例えば海塩・鎮江・蘇州等地の私蔵の珍本も大半強奪の目に遭っている。

徐州の戦没以降、戦争が長期化するようになってから、日本は従来の文化侵略の手口を又使うようになり、日本の浪人や中国の漢奸を出勤させては世論を翻弄したり、御用宗教団体を林立させたり、日本語の習得を強制したり、文化人・知識人を買収したり、売国的・迷信的な出版物や淫書を乱発したりして、中国は百鬼夜行、魑魅魍魎の世界に化している。

日本の文化侵略の目的は一貫して中国人の民族意識を消滅し、抗戦の意志を挫くところにある。

概して言えば、郭沫若の日本観・日本論は、近代日本は中国に対して政治侵攻・軍事侵攻・経済侵攻・文化侵攻を実施し、中国を滅ぼそうとする国である、というものである。

IV. 日本人の性格

郭沫若は前述の通り、2回に分けてではあるが、合わせて20年も日本に滞在した。しかし、1回目は留学で、関心事は欧米文学、詩作であったし、2回目は亡命で、それまでの人生を振り返り、自伝を書いたり、中国の歴史や甲骨文・金文を調べたりで、日本・日本人の研究をやった訳ではないどころか、日本の文芸界・作家・学界・学者或いは普通の日本人との付き合いも少ない方であった。自ずと日本人の民族性・国民性に対する観察は表面的になりがちであるし、認識も浅い、時には偏見と言われるのも免れない。時代、特に日中戦争という背景もあって、日本人に対する尊敬の念や愛情などの感情が生じるはずがなく、どちらかという、その評価は消極的・マイナス・批判的であると言えよう。後日、と言っても、何十年後になり、郭沫若が中日友好協会の名誉会長のポストに就き、日中両国の友好親善交流協力の仕事をやるようになり、又日中国

交正常化し、日本の友人と接触する機会が随分増えたにもかかわらず、その日本人観は熱くならず、冷め切ったままであった。中国の文化人・知識人は総じて、アメリカを崇拜し、アメリカに恐怖を感じると同時にアメリカに親近感も感じている。それに対して、日本は軽視し、日本人を馬鹿にする傾向がある。中国共産党・政府も日本には常に強硬で、柔軟性に欠け、冷静どころか、冷たい。郭沫若の与えた影響と大なり小なり関係がある。

1937年7月、日本から一人で帰国させるを得なくなる訳であるが、郭沫若はアンナのことが心配で堪らない。それを察して書いたものがある。⁶⁴

「かれとその近所は、平素とても仲がよい。何軒から、行き来して、大変親密であるが、しかし、日本人は結局は日本人であって、われわれはかれらを、ほんとうの友人とみることはできない。かれらの目は、とくに勢力や利益に聡いようだ。かれの帰ったことをかれらが発見すると、かれの家族に対して、急に冷淡となり軽蔑し、あるいは安娜夫人を笑いものにするにちがいない。

『郭さんは帰って行ってしまったんだってねえ。』

『あなたは後家さんになりましたねえ。』

『あなたの生活問題は将来おもしろいられるねえ。中国人と結婚すると、いろいろ、頼りにならぬことがあるでしょう。もしもあの人がおもしろいなら、はっはっは！』

『……』また、かれらはたがいにひそひそと囁きあって、ひとの不幸を喜び、彼女の悪口を言うだろう。それは安娜夫人からいって、ほんとうに、たえがたい、つらいことである。鼎堂先生はどうしてそのようなことを知りながら、彼女を放って帰っていけよう。』

皮肉にもその話は的中し、彼は心変わりするのであるが。

郭沫若は「日本の子供」⁶⁵で、どうしても忘れられない逸話として、市川にいた頃、8、9歳になる娘淑子を連れて村にある八百屋へ買物に行った時のちょっとした出来事を書いている。その日は生憎雨で、道は泥沼になっていた。八百屋の前まで来た時、同じ年ごろの男の子がよろよろめきながらやって来た。道路は狭くないのに、自分からは避けようとせずに、淑子の足を踏みつけた。足は痛いし、靴下も汚れた。その子は謝るところか拳骨で淑子の背中を殴り、睨み付けながら、「こら！この野郎！邪魔だ、退かないか！」と怒鳴った。「本当に質の悪い子だと思ったが、私は淑子を連れてその場を離れた。」そして、こう書くのである。

「子供は可愛いもので、私自身一倍子供が好きである。ところが、日本の殆どの子供はその可愛らしさを失ってしまっている。日本の子供はややもすれば直ぐ戦争ごっこをしたがり、3人5人で泥棒の真似でなければ兵隊の真似をする。新聞紙で兜を作ったり、竹や木の枝で刀・槍を作って遊ぶ。……これは日本の教育がそうならしめたのであるの言うまでもない。戦争好きな日本人はその侵略根性を幼児の時から骨髓に徹するまで植え付けるのである。」

彼の親友である郁達夫が恐らく日本の憲兵に暗殺されたであろうと聞き、彼はその責任は佐藤春夫にあると推測する。⁶⁶支那事変が起こって間もなく彼の日本脱出、帰国はその半年前に来日した郁達夫と密接な関係があると佐藤春夫は思い込み、「中央公論」に発表した「アジアの子」という小説で、郁達夫をスパイに仕立て上げ、描くのである。佐藤春夫は魯迅を日本に紹介したというので、中国の一部の作家からは好感を持たれていたが、実際彼は日本軍閥の代弁者であり、

大日本主義の積極的な鼓吹者である。そして又「日本人は心が狭くて小さい上に、仇討ち・報復の気持ちがとても強い」と来ている。日本の憲兵は郁達夫のそのことを覚えていて、悔しいが故に、彼を殺したのである。と郭沫若は断言し、日本の昭和天皇を断頭台に送るべき、日本のファシストの頭目全体の命で償うべきと主張する。

日本人は「平時我々を中華民国或いは中国と呼ぶのを潔ぎよしとしなく、必ず『支那』と呼ぶ。日本人の口から吐き出す『支那人』は本当に人間ではない。彼等はずっと前から我が国を滅ぼし、我が民族を消滅しようと企んで来ているので、我々を劣等な人種と見るのである。」⁶⁷⁾

『『支那』という言葉は、鼎堂が平素一番いやがる言葉である。『支那』は英語の China に等しいけれども、日本人の口から言われると、ばかにした語調があるのである。』⁶⁸⁾

声が枯れるまで絶叫しているのが次の件である。⁶⁹⁾

「ああ、ここは昔遣唐使が西の方にある我が国に渡航する港であった。その時、日本の使臣及び唐に行く留学生は我が国で我々が今受けているような虐待に遇ったであろうか。私は阿部仲麻呂が我が中国に来てから、その名を晁文卿と変えたのを覚えている。彼が日本に帰る時、その船が難破したというデマが飛び、李白は又詩まで吟じ、弔ったではないか。錢起に和上の帰国を見送る詩があったように思う。その時の日本の留学生は決して我々のように風雨を凌ぐ場所さえないということはなかったであろう。我々はここに住んでいて、何時も何人かの刑事に監視されている。我々は只『支那人』と一言耳にするだけで、ショックを受ける。ああ、これは何たる扱いであろうか。」

「日本人よ日本人！君たち日本人は本当に思知らずの人種である。我々中国が君たちに何をしたらと言うのだ、ここまで我々を蔑視しようとは？君たちは単に『支那人』という3文字を口から吐き出すだけで、既に我々に対する最大の悪意を曝け出しているのである。君たちは『支』の字を発音する時はわざと鼻に皺を寄せ、『那』を発音する時は鼻音を長く延ばす。ああ、君たちは果たしてこの『支那』という言葉がどこから来ているのかを知っているのであろうか。ああ、恐れ多くも、あの秦の始皇帝の秦の時代、君たちはまだ野蛮な人種で、南洋で椰子でも食っていたのかも知れないのに！」

「ああ、思知らずの日本人よ！君たちに知って欲しい、私は何故に日本人の偽名を使うのかを。それは何も君たちの文化・文明が羨ましくてではない。それは君たちのだまし討ちから身を守るためなのである。君たちの帝国主義は成功を収めたが、君たちの良心は地に落ちてしまった。君たちはややもすると直ぐ我々は君たちを誤解していると言うし、君たちの侵略に対し正当防衛をする我々を不逞のやからと言う。ああ、思知らずの日本人よ。君たちの心はどこまで深いのか知らないが、我々が誤解するほどの深さがあるのであろうか。司馬昭の心人皆知ると言われているように君たちの下心は火を見るよりも明らかである。人を愚か者扱いするのはよしたまえ！君たち悔い改めたまえ！悔い改めたまえ！よしんば私が娶ったのが君たち日本の女子にしても、君たちが悔い改めなければ、私は何時までも君たちを敵と見做すし、私の女房も君たちを敵と見做すであろう！……」

郭沫若は日本の民族性に就いて、中国と比較しながら、次のように見ている。⁷⁰⁾

「鼎堂はわたしに言った：中国人は好んで柳を植え、日本人は好んで松を植える。それははっ

きりと二つの民族性の違いをあらわしている。懦弱と剛愎との違いだ。かれはまたわたしに訊いた：『君は初めて日本人の下駄の音を聞いた時、異様にかんじたかね？』かれは言った：かれが初めて日本に来た時、停車場で下駄の音を聞いて、『これは馬蹄の音が入り混じって聞こえるのだろう。』と思った。このたとえは、適切でもあり、幽妙でもある。』

彼は日本人の友達の口を借りて、こう言っている。⁷¹⁾

「彼は又日本人の悪口を言うのが好きで、口を開けるとすぐ日本人はよく人をだますとか、付き合ってはいけないとか言った。私が返事に困っているのを見て、彼は何時も弁解気味に、『私は日本人ですが、どうも自国人の悪口を言うのが好きで、……Japanese is fox, fox!』と言うのであった。」

「日本人で、我々中国人に対してまだ多少なりとも敬意を抱いている人は次の二種類の人しかない。60歳以上の老人と漢文の研究を専門とする学者である。』⁷²⁾そして、岡山留学時代、隣に住んでいた中学校の漢文の先生の例を挙げ、その先生は「人が古風で、変っている。彼が最も崇拜しているのは孔子である。」と書いている。

1937年の春、東京にいる一部の中国人留学生が曹禺の「日の出」を上演し、日本人から大変な好評を博した。それを2回目に見に来た秋田雨雀が郭沫若にこう話した。⁷³⁾「中国人は誠に天才である。『日の出』のようなスケールの大きな劇・台本は日本では稀にしか見れず、非常に少ない。とりわけ封さんのような女優は日本で新劇運動が始まって以来育ったことがない。『日の出』でヒロインに扮したのは復旦大学卒業生の封禾子さんであった。それを受けて、郭沫若は書くのである。「秋田雨雀のように中国人の長所・美点を自分の国の人・内輪の人・身内の長所・美点として喜んでくれる人は日本には彼しかいない。……封さんは日本に留学するつもりであったが、日本人の迫害に耐えられず、芦溝橋事変が起こる前にもう帰国してしまった。……彼女が熱海の温泉へ行った時など、トイレや風呂場まで尾行がついた。……普通中国人をよく思わない日本人は我々を嫉み、我々の成長・発展を妨げようとするのである。」

彼は今から60年も前の1939年に書いた「文化と戦争」という文章で、既に日本人の創造性に就いて、次のように述べている。⁷⁴⁾

日本は「ヨーロッパ文化の洗礼を受けてから僅か6、70年しか経っていない。その6、70年前までは完全に中国文化の影響下にあった。この文化の二重性ははっきりと日本人の服装に現れている。日本人は外出する時に洋服を着、家では和服を着る。この和服というのは実は我々中国の昔の服なのである。或いはこのような歴史から来ている一種の相当特異な民族性かも知れないが、彼等は導入には長けているが、創造性には欠けている。」それに対し、中国人は創造力が強く、絶え間なく文化をハイレベル、ハイレベルへと発展させることが出来るのである。

「日本人は一般的に言って自国の昔の作家及び価値のある作品は殆ど知らないのに、西洋のソ連と欧米の作家及び作品には非常に詳しい。」⁷⁵⁾ 翻訳にも紹介にも力を入れているし、早い、それに対し、中国は遅れている。価値のある、特に世界的な価値のある作品も少ない。「日本人は中国人より利口とは言えない。」やはり、中国の作家は努力が足りず、いい加減であるからである。

傅抱石は東京で個展を開いたことがあるが、ある日横山大観も見に来た。「何人かの供が群が

り、彼を取り囲んでいたが、彼の超然とした傲慢な態度はまるで王侯貴族の風貌とそっくりであった。こういったところは、日本人の風俗慣習と我々のとは少し違う。横山大観もたかが一人の画家に過ぎないのに。……画家の社会的地位は少し高い。」⁷⁶⁾

郭沫若が北伐に参加し、「武昌を占領したとき、日本の各新聞社、各通信社はいずれも専門の記者を派遣して勤勉に四面の消息を探訪調査せしめた。」⁷⁷⁾「日本人の中国の事件に対する関心、中国の事情に対する偵察は、真に微不至らざるなしである。」

日中戦争で、彼が漢口から船で撤退する時のことであるが、日本軍の飛行機の空襲が多いのに、彼が乗った船は爆撃を受けなかった。「日本人の情報は異常に敏感だったから、きっと要人連の乗船していないのを早くも悟って、あとの船客には一発見舞う値打ちすらないと考えたかもしれない。」⁷⁸⁾

広州が陥落したことは、武漢を攻める日本軍に刺激と激励を与え、攻撃が更に激化した。それを見て、彼はこう言うのである。⁷⁹⁾「派手な手柄を好む貪婪な敵が、広州占領の報で火に油が注がれ、競争心に狂ったとしてもむりはない。最後の数日間、撤退中のわが方の車や船に対する空襲がことに激しく、それは気狂いじみた競争心のてきめんな現われと見えた。」

と同時に、「日本人の習性としては、負けず嫌いである。戦に1回でも負けたら、必ず必死になって報復し、名誉挽回しようとするのである。」⁸⁰⁾

日本人の目から我々中国人は死を恐がっているか見え、彼等はそれを一番軽蔑している。それに対し、彼等は死を恐がらないと自負している。⁸¹⁾ところが、1932年1月、上海事変の時、中国第十九路軍は勇敢に戦った。日本人に若しも中国の軍がみな第十九路軍のようであったら、中国は征服できないと思わせたくらいである。「日本人は英雄崇拜で、結果的に第十九路軍が悲劇に終わったことは、彼等をして第十九路軍を更に感心・褒めたたえさせた。」⁸²⁾

「日本人は器が小さく、度量も視野も狭い。事を起こす前には相手を軽蔑し、軽拳妄動に出る。事が起こってからは又局部しか見ず、全体が見えない。事が終わってからは直ぐ忘れてしまい、又轍を踏むのである。」⁸³⁾

そして又「日本人は一貫して過ちを知りながら、その過ちを押し通すのが好きな民族」⁸⁴⁾でもあると断じている。

筆者は郭博氏の御夫人の華江さんと復旦大学で研究室を共にして10年以上も一緒に仕事をした。色々とお教示いただいたのは言うまでもないが、その関係で郭博氏にも何度もお会いした。中国プロレタリア文化大革命中、当時学長をしていた父が槍玉に挙げられ、何千枚という壁新聞で批判され、筆者が悄気込んでいるのを御覧になられ、「それはあなたのお父さんを批判しているというよりもむしろそれを書いた奴の顔を映し出しているのだ。『照妖鏡』（妖魔の正体を照らし出す魔法の鏡）だ！」と仰って筆者を励まして下さったことをまるで昨日の事のように覚えている。この場所を借りて謝意を記しておきたい。

註

1) 馬彬著、郭沫若批判、燎原出版社、1975年9月重印1版、179ページ。

- 2) 金達凱著、郭沫若総論——三十至八十年代中共文化活動的縮影、台湾商務印書館、民国七十七年九月、1 ページ。
- 3) 殷塵著、さねとうけいしゅう訳、郭沫若日本脱出記、第一書房、1979年11月、6 ページ。
- 4) 王訓詔等編、郭沫若研究資料 上、中国社会科学出版社、1986年 8 月、39ページ。
- 5) 同 4) 54ページ。
同 3) 250ページ。
- 6) 同 2) 307ページ。
- 7) 同 2) 351ページ。
- 8) 同 2) 355ページ。
- 9) 同 2) 356ページ。
- 10) 同 4) 243ページ。
- 11) 魯迅全集 6、学習研究社、昭和60年 4 月、123ページ、125ページ。
- 12) 同 4) 287ページ。
- 13) 同 4) 521ページ。
- 14) 郭沫若全集、文学編第十八卷、人民文学出版社、1992年 1 月、371ページ。
- 15) 同13)。
- 16) 同 4) 51ページ。
- 17) 同 4) 59ページ。
- 18) 同 4) 447 ページ。
- 19) 同 4) 1 ページ。
- 20) 岡崎俊夫・松枝茂夫訳、現代中国文学 3、郭沫若、河出書房新社、昭和46年 3 月、243ページ。
- 21) 松枝茂夫等訳、現代中国文学全集 第二卷、郭沫若、河出書房、昭和29年 6 月、128ページ。
- 22) 小野忍、丸山昇訳、黒猫・創造十年他、郭沫若自伝 2、平凡社、昭和48年 7 月、57ページ。
- 23) 同21) 130ページ。
- 24) 同21) 204ページ。
- 25) 同21) 218ページ。
- 26) 同 4) 448ページ。
- 27) 同 4) 469ページ。
- 28) 同20) 142ページ。
- 29) 同21) 204ページ。
- 30) 同20) 196ページ。
- 31) 同21) 141ページ。
- 32) 同20) 139ページ。
- 33) 同20) 143ページ。
- 34) 同20) 150 ページ。
- 35) 同20) 148 ページ。
- 36) 小野忍・丸山昇訳、統海講集・帰去来、郭沫若自伝 5、平凡社、昭和46年11月、169ページ。
- 37) 同22) 21ページ。
- 38) 桑逢康、郭沫若和他的三位夫人、海南出版社、1994年 4 月、266ページ。
- 39) 同38) 239ページ。
- 40) 同20) 156ページ。
- 41) 同20) 184ページ。

- 42) 同20) 191ページ。
- 43) 郭沫若全集、文学編第十九卷、人民文学出版社、1992年1月、158ページ。
- 44) 同21) 264ページ。
- 45) 同14) 139ページ。
- 46) 同14) 128ページ。
- 47) 同14) 143ページ。
- 48) 同14) 153ページ。
- 49) 同14) 202ページ。
- 50) 同47)。
- 51) 同14) 171ページ。
- 52) 同14) 158ページ。
- 53) 同14) 233ページ。
- 54) 同14) 130ページ。
- 55) 同14) 148ページ。
- 56) 同14) 290ページ。
- 57) 同20) 165ページ。
- 58) 同20) 208ページ。
- 59) 同20) 172ページ。
- 60) 同58)。
- 61) 同20) 186ページ。
- 62) 同21) 119ページ。
- 63) 同14) 352ページ。
- 64) 同3) 104ページ。
- 65) 同14) 173ページ。
- 66) 郭沫若全集、文学編第二十卷、人民文学出版社、1992年8月、290ページ。
- 67) 同14) 243ページ。
- 68) 同3) 182ページ。
- 69) 郭沫若全集、文学編第九卷、人民文学出版社、1985年6月、308ページ。
- 70) 同3) 55ページ。
- 71) 同69) 355ページ。
- 72) 同69) 51ページ。
- 73) 同14) 306ページ。
- 74) 同43) 10ページ。
- 75) 同43) 200ページ。
- 76) 郭沫若全集、文学編第十卷、人民文学出版社、1985年9月、303ページ。
- 77) 同20) 75ページ。
- 78) 同20) 377ページ。
- 79) 同20) 369ページ。
- 80) 同14) 244ページ。
- 81) 同14) 259ページ。
- 82) 同66) 31ページ。
- 83) 同14) 295ページ。

提要

郭沫若究竟是率领知识分子冲锋陷阵的主将还是见风使舵的机会主义分子，至今尚未定论。尤其是他在文革中出尔反尔，起初紧跟四人帮，事后喊叫打倒四人帮，不要说人民群众，就是一般知识分子也不至于如此，给人以极坏的印象。本文从是对促进中国现代化做出了贡献还是阻碍了中国现代化的实现的观点来分析郭沫若的功过。从五四运动时期，北伐，抗日战争到中华人民共和国的建立，土地改革为止，基本上是立了功。但，其后到逝世，完全是过。总的来说，正如鲁迅所说，他是才子加流氓。可是，不能忽视他对中国文化界、学术界有过一定的影响，特别是对中国共产党知识分子政策以及对日政策的制订及执行，他是起过出谋划策和吹鼓手的作用的。

郭沫若曾两次东渡日本，一次是留学，一次是流亡，总共达二十年。他的思想和性格的形成以及成熟都是在日本实现的。他充分地利用了日本的有利条件，又靠了安娜夫人的献身般地支持和协助，才得以完成创造社前后的浪漫主义的诗篇，记叙革命和战争的一个侧面的自传体小说，历史，考古学，文字学的研究等这些工作。

郭沫若认为，日本从中国全面地引进文化，包括经济基础，上层建筑各个方面，由原始社会越过奴隶制社会直接跳到封建社会；又学习欧洲文明，创造了“东方的奇迹”。日本之所以能发展到资本主义社会，进入列强的行列，是因为它的殖民地价值比中国低得多，中国吸引住了帝国主义列强的注意力，起了挡箭牌的作用；中国又成了它最好的原料供给地和市场。当然还有内部的因素。可是，日本忘恩负义，恩将仇报，几十年来一直侵犯中国，直到发动全面侵华战争。

由于这样的时代背景，加上他和日本人的接触并不广泛，深入，所以对日本人的看法，总地说是消极，冷淡，片面，带有批判性。

中华人民共和国建立，特别是日中邦交正常化以后，他虽然担任中日友好协会名誉会长，但他论日本和日本人的著作文章很少，无法知道有了什么变化。

